

加訳（日→中）再論

—接続詞（中）・副詞（中）の加訳（日→中）について—

藤 田 昌 志

《加译(日→中)再论—关于连词(中)・副词(中)的加译(日→中)—》

FUJITA Masashi

【摘要】

本稿は接上筆者所写の前稿(1991)《关于加译(日→中)》的。对照日语和汉语时,关于日语里没有的连词(中)・副词(中)加进去汉语里的场合,以三种现代日本文学作品的中译本为资料进行考察连词(中)・副词(中)加译(日→中)的各种情况。具体地说,我进行考察有关“于是”“一直”“其实”“然后”“竟”“竟然”“实在”的加译(日→中)的各种情况。

キーワード：加訳（日→中） 接続詞（中） 副詞（中） “实在”と“其实”の
使い分け、「棲み分け」現象

1 序

「加訳（日→中）再論—接続詞（中）・副詞（中）の加訳（日→中）について—」は日本語表現が中国語表現になる場合、日本語表現にない接続詞（中）・副詞（中）が加訳（日→中）される場合について、三つの現代日本文学作品と対応する中国語訳を資料として、その諸相を考察するものである。従来、こうした日中対照語学、日中対照表現論関係の研究はほとんど行われておらず、翻訳論の技術として断片的に述べられることはあっても、客観的に接続詞（中）・副詞（中）のどのようなものが頻度が多く加訳（日→中）されるかといったことには研究が及んでいない。それは日本語話者対象の中国語教育に資するところも多く、今後、より深化させていく必要のある研究の一つであると考えられる。

2 先行研究と研究方法について

拙著(2007)『日中対照表現論—付:中国語を母語とする日本語学習者の誤用について—』白帝社刊(以下、拙著(2007)と略す。)では、第一章 加訳（日→中）について⁽¹⁾で二、

「数詞“一”＋量詞」の加訳、三、指示代詞の加訳、四、「具体性」の加訳—について考察した後、五、より言語習慣上の理由が色濃い加訳として“不由得“再说”“竟”などを取り上げて考察した。（「言語習慣上の理由が色濃い」と言う言い方は適切ではないかもしれない。）「そのほか、加訳（日→中）を必要とする語が多数、存在するであろうが、それについては今後の研究課題としたい」⁽²⁾と述べたが、今回は三冊の日本現代小説（いずれもベストセラー作家の作品）とその中国語訳を資料として、主として副詞、接続詞の加訳（日→中）の実態について考察してみたい。

三冊の日本現代小説とその中国語訳は以下のものである。いずれもベストセラー作家の作品であることから選定した。①東野圭吾（2009）『悪意』講談社 講談社文庫／娄美莲译（2009）《恶意》南海出版公司②道尾秀介（平成 21）『向日葵の咲かない夏』（=『向』）新潮社 新潮文庫／于彤彤（2009）《向日葵不开的夏天》（=《向》）新星出版社③村上春樹（2010）『ノルウェイの森』（=『ノル』）（上）（下）講談社 講談社文庫／林少华（2010）《挪威的森林》（=《挪威》）上海译文出版社。

拙著（2007）で取り上げた“不由得”や“再说”がさほど多くなく、“于是”“一直”“其实”“竟”（“竟然”）“然后”“实在”などの頻度数が今回、調べた結果では高かった。今後、さらに別種の小説や異なったジャンルのものについて調べていく必要があるであろう。「理」性的認識によるものではなく、具体的「事実」についての考察である。「文法」に対する、「表現」の頻度数を中心とした考察と言ってもよい。事例研究の一つとして位置づけられる。

次に 3.各冊の副詞、接続詞関係の加訳（日→中）の特徴、4.三冊全体の副詞、接続詞関係の加訳（日→中）の特徴 5.結語の順で考察していくことにする。

3 各冊の副詞、接続詞関係の加訳（日→中）の特徴

3.1 『悪意』→《恶意》についての副詞、接続詞関係の加訳（日→中）の特徴

『悪意』→《恶意》における副詞、接続詞関係の加訳（日→中）の頻度別ランキングは以下のものである。

順位	加訳（日→中）された副詞、接続詞	数
1	一直（副詞）	24
2	竟然（12）竟（5）（副詞）	17
3	于是（接続詞）	11

4	突然（副詞）	10
5	终于（副詞）	8
6	确实（副詞）	6
6	反正（副詞）	6
6	其实（副詞）	6
9	实在（副詞）	5
9	毕竟（副詞）	5

全体のランキングに関係のある“其实”は6位で、“实在”は9位であった。“然后”（接続詞）は11位以下で4例であった。

1位“一直”（24。（ ）内の数字は用例数を表す。以下同じ。）については、意味的には基本的に㊦空間的連続（ex.「まっすぐに～する。」）㊧時間的連続（心理、動作、状態が途切れないこと。）の二つに分けられるが、《悪意》においてはすべて㊧時間的連続の例（24）であった。㊦空間的連続は0例であった。㊧時間的連続の例（24）のうち“一直”の後の動詞は心理動詞関係が8例あった。“觉得”（2例）“忘记”“想”“期盼”“心存恐惧”“以为”“认为”（すべて1例）がそれであり、具体例には次のようなものがある。

- (1) 「だが私は正直なところ、犯人は彼ではないかと疑っている。」（『悪意』 p.62）
→ “老实说，我一直觉得凶手应该是他。”（《悪意》 p.62）

この場合、日本語にはない副詞“一直”が加訳（日→中）されている。

2位“竟然”（12），“竟”（5）（=計17）は「(思いがけない状況が発生した場合の) 意外にも、なんとこともあろうに」という意味を表し、“竟”の同義語として“居然”や“竟然”がある⁽³⁾。“竟”（5）より“竟然”（12）の方が2倍以上、使用されているのは注意を引くが、後に続く動詞（中）には“是”や“发现”“提出”“利益”“会有”“成为”など静的（状态的）動詞が多いように見受けられる。もっとも次の例などは「なる」的表現（日）を「する」的表現（中）にするものである。「ああ、そうなんですか。ねえ、びっくりしますものねえ。あの子たちがあんなことに……。わからないものですよねえ。」（『悪意』 p.290）
→ “哦，是这样啊？是呀，我吓了一跳，那个孩子竟会做出……。我真是无法理解”（《悪意》 p.212）。この場合、「意外性」を明示的に表現しない日本語と明示的に表現する中国語という考えかたもできるが、そもそも「意外性」というモダリティ（話者の心的態度）をどのようにとらえるか、何を「意外性」ととらえるかということに関する両言語観のずれが存

在すること、そのずれの実態を今後、究明する必要がある。

3位“于是”(11)は《向》では1位(31)で《挪威》でも1位(26)の接続詞である。詳しくは四、三冊の翻訳本全体の副詞・接続詞関係の加訳(日→中)の特徴で述べたい。

3.2 『向日葵の咲かない夏』(=『向』)→《向日葵不开的夏天》(=《向》)についての副詞、接続詞関係の加訳(日→中)の特徴

《向日葵不开的夏天》(=《向》)における副詞・接続詞関係の加訳(日→中)のランキングは以下のようなものである。

『向』→《向》における副詞、接続詞関係の加訳(日→中)の頻度別ランキング

順位	加訳(日→中)された副詞、接続詞	数
1	然后(副詞)	31
2	究竟(副詞)	28
3	于是(接続詞)	24
4	一直(副詞)	21
5	实在(副詞)	19
5	其实(副詞)	19
7	终于(副詞)	13
8	突然(副詞)	6

	竟然(副詞)	3

1位“然后”(31)は《向》の特徴で、《恶意》では9位以下(4)、《挪威》では6位以下(4)で、《向》でだけ著しく多用されている接続詞である。この訳者は非常に時間的順序にこだわり(日本語では明示されていない)、“然后”の加訳(日→中)を多用している。以下はその典型例である。

- (2)「僕は、死んでからも、あいつにおかしなことをされているんだ。両足をばきばき折られているかもしれない。口に石鹼が詰め込まれているかもしれない。」(『向』p.198)→“我都已经死了，可那家伙还在我身上干一些古怪的事情。可能把我的腿折断了，然后还在我的嘴里塞了块香皂。”(《向》p.145)

2位“究竟”(28)は日本語が「何」「どう」「どこ」「どんな」「どうして」「ど`ういう」を含む表現である場合に加訳(日→中)されることが多い。(ex.「先生は何を言っているのだろう。」(『向』p.48)→“岩村老师究竟在说些什么啊!”(《向》p.33)。)

3位“于是”(24)は既述のように、《善意》で3位(11)、《挪威》で1位(26)で、三冊ともに高ランキングの接続詞である。24例中、日本語が1文であるのに中国語が2文であるものが3例あった。(ex.「何か別のことを考えて気持ちを落ち着かせようと、僕はシャープペンを取り出した。」(『向』p.9)→“总该想点儿别的什么事好让自己平静平静。于是,我拿出自动铅笔,~”(《向》p.6))『善意』→《善意》ではそうした例は皆無であった。

4位“一直”(21)のすべてが時間的連続を表すもので、空間的連続を表す“一直”の加訳(日→中)は0例である。

5位“实在”(19)の加訳(日→中)は「強調」の意の「本当に」の意味のものがほとんどである。(ex.「申し訳ありませんでした。~」(『向』p.150))→“唉呀,实在是太抱歉了。”(《向》p.109。)少なくとも「上文への反対」の意のものは0例である。同5位の“其实”(19)の加訳(日→中)は16例が「修正、補充」の意のものである。(ex.「違和感。そうじゃない。~」(『向』p.195)→“有什么东西不对劲儿,其实也不是。”(《向》p.143。))

3.3 『ノルウェイの森』(=『ノル(上)(下)』)→《挪威的森林》(=《挪威》)についての副詞、接続詞関係の加訳(日→中)の特徴

《挪威的森林》(=《挪威》)における副詞、接続詞関係の加訳(日→中)の頻度数ランキングは以下のものである。

『ノルウェイの森』(=『ノル(上)(下)』)→《挪威的森林》(=《挪威》)における副詞、接続詞関係の加訳(日→中)の頻度別ランキング

順位	加訳(日→中)された副詞、接続詞	数		
		(上)	(下)	
1	于是(接続詞)	18	9	27
2	其实(副詞)	11	13	24
2	居然(副詞)	9	15	24

4	竟 (副詞) 竟然 (副詞)	7 2	4 1	14
5	不由 (副詞) 不由得 (副詞)	3 1	5 1	10
・	・	・	・	・
	然后 (副詞)	1	3	4
	一直 (副詞)	2	2	4
	实在 (副詞)	3	1	4

1位“于是”(27)の加訳(日→中)については日本語が1文であるのに中国語が2文になり“于是”が加訳(日→中)されるものが27例中、6例あった。日本語が長い1文の際、中国語“于是”で文を切って2文にする、つまり“于是”には長い文を切る役割があるようにも考えられる。次はその例である。

- (3) あなたはいつも自分の世界に閉じこもっていて、私がこんこん、ワタナベ君、こんこんとノックしてもちよっと目を上げるだけで、またすぐもとに戻ってしまみたいす。(『ノル』(下) .213) → “你总是蜷缩在你自己的世界里，而我却一个劲儿“咚咚”敲门，一个劲儿叫你。于是你稍稍抬一下眼皮，又即刻恢复原状。”(《挪威》p.325)

日本語が2文で中国語が1文になるものは24例中、1例もない。

同数2位“其实”(24)は「補充」の意味のものが23例(ex.「シェークスピア以外の人の名前は聞いたことがないな、と彼は言った。僕だってほとんど聞いたことはない。」(『ノル』上)p.33) → “他说，除莎士比亚外都没听说过。其实我也半斤八两，～”(《挪威》p.20。))、「反論」の意味のものが1例あった。(ex.「訊くったってたいしたこと訊かないわよ。～」(『ノル』(下)p.276) → “说是询问，其实也没深入问什么。”(《挪威》p.365。))

同数2位“居然”(24)は4位“竟”“竟然”(14)の同義語、類義語である⁽⁴⁾。一応、別々にしておくが、意味的に同様のもの=「意外性」を表すからここでは一括して考える。《悪意》のところで述べたが《悪意》では“竟然”(12) > “竟”(5)であった。《挪威》では“竟”(11) > “竟然”(3)で“竟”のほうが“竟然”の3倍以上使われている。“居然”については《悪意》は0例で《挪威》は24例あり、訳者の好み、もしくは訳者の世代間の相違が反映しているようにも思える。後続の動詞については“居然”(24)については

静的動詞や（心理）状態を表す表現などが多く（ex.「(十五分) かかる」→“花”、「わけがわからない」→“莫名其妙”、「思い出す」→“想起”、「(そういう) 考え方（できるのって）」→“想”、「(縁側まで) あった」→“有”、「(国家の庇護を) 受けることができまい」「享受不到」etc.）、“竟”“竟然”についても「思い出す」→“想起”、「のを発見した」→“发现”、「不思議な気がした」→“不可思议”、「与える」→“满足”、「怒る」→“发火”、「すがすがしく感じられた」→“沁人心脾”、「いる」→“呆”などといった静的動詞や（心理）状態を表す動詞が多いようである。

5位の“不由”“不由得”（10）は《悪意》では0例、《向》では“不由自主地”（『向』p.10、《向》p.7）が1例あるだけである。訳者の表現の好みの反映であろうか。

4 三冊全体の副詞、接続詞関係の加訳（日→中）の特徴

4-0

4では三冊の総合によって副詞・接続詞関係の加訳（日→中）の頻度数のランキングを暫定的に決定し、その一つ一つについて考察を加えてみたい。三冊合計のランキングは次のようになった。

三作品の副詞、接続詞の加訳（日→中）使用頻度数ランキング

順位	加訳（日→中）された副詞、接続詞	数
1	于是	62
2	一直	49
2	其实	49
4	然后	39
5	竟（16）、竟然（18）	34
6	实在	28

“于是”は『悪意』→《悪意》で3位（11）、『向』→《向》で3位（24）、『ノル』（上）、『ノル』（下）→《挪威》で1位（27）であるから3冊総合で1位である。結果に問題はない。“然后”が4位（39）となっているのは、ひとえに『向』→《向》“然后”1位（31）となっていることによるものである。「暫定的」にランキングを決定したというのはそうした面を考えてのことである。今後、事例研究的に、より多くの副詞、接続詞の加訳（日→中）例を収集して、客観性を高めていく必要がある。

4-1 1位“于是”の加訳（日→中）(62)の特徴

接続詞1位の“于是”(62)は辞書的には次のように説明されている。(2012)《現代漢語詞典》(以下、(2012)《現漢》と略す。)では“表示后一事紧接着前一事,后一事往往是由前一事引起的”⁽⁵⁾(「後事が前事に密接に続いていて、後事はしばしば前事によって引き起こされることを表す。)」と説明している。伊地智義継編(2002)『(2002)白水社中国語辞典』(2002)白水社(以下、(2002)白水社と略す)では(1)「‘于是’は二つの動作の関係がそれほど緊密でなく、前の動作を受けて中間で一休みして次の動作に移るという気持ちがある」と説明されていて「‘……, 于是……’の形で幾つかの動作が継起することや前節で述べたことから後節で述べるのが引き起こされることを示」し、日本語訳として「ここにおいて、そこで、それで」を提示している⁽⁶⁾。他の辞書も大体、同じ日本語訳をあてているが、内容説明では(2008)『超級クラウン辞典』三省堂(以下、(2008)三省堂と略す。)が用法として「前のことがらを受けてすぐに後文のことがらが起きるという意味をあらわす」⁽⁷⁾としているのは(2002)白水社の「中間で一休み」するという説明とは真っ向から対立した説明である。“于是”の加訳(日→中)の典型例とは次のようなものであろう。この例から上記の説明の対立について考えてみることにしたい。「冷蔵庫にビールが入ってるから、そこに座って飲んでくれる？」と緑がちらっとこちらを見て言った。僕は冷蔵庫から缶ビールを出してテーブルに座って飲んだ。」(『ノル』(上) p.139) → ““电冰箱里有啤酒,坐在那里喝可好?”绿子眼睛朝我忽闪一下。我于是从电冰箱里拿出罐装啤酒,坐在桌前喝了起来。”(《挪威》p.88) 明示されていない限り「すぐに」「冷蔵庫から缶ビールを出し」たとはいえ考えにくいであろう。「おもむろに」「冷蔵庫から缶ビールを出し」と充分、考えられる。もっとも(2002)白水社の「中間で一休み」してと言うのも、「気持ち」であるから、より正確には“于是”の機能は前と後ろの間の「区切り」のような感じを表すのであろう。それは「文を切る」ようなものになる場合もあるであろう。特に長い文の多い日本語を中国語に翻訳する際には“于是”の「区切り」「文切り」の機能は効果を発揮する。日本語が1文であるのに、中国語が“于是”を挟んで2文になる場合は《向》で3例(全体24例)、《挪威》で6例(全体27例)あった(《悪意》は0例(全体11例))が、それはそうした「文切り」の機能の“于是”によって中国語が2文になったものであろう。(ex.三-2の《向》の例、三-3の《挪威》の例を参照のこと。)

逆に日本語が2文で中国語が1文になる場合が《向》に1例だけあった。次のような例である。ex.「一でも、お巡りさんといっしょに駆けつけたとき、僕の家の中に、一見おかしなところはなくて、ミチオ君の話は何かの間違いだったんじゃないかということになればどうだろう。岩村先生はお巡りさんの目の前で、べたべたと、いろんなところに触るこ

とができる。」(『向』 p.122) → “可是, 如果警查到了我家时发现家里没有什么异常, 那么警查就会怀疑道夫君你说的话是不是可能有错误, 于是岩村老师就可以当着警查的面在这屋子里面摸来摸去留下自己的指纹了。”(『向』 p.88)。これはあまりいい中国語訳とは言えないであろう。なぜなら“于是”の前が非常に長いのであるから、やはり“于是”の前で一端、文を切って“于是”に続けるのが中国語としては自然であろう。この場合は前が長いので「区切り」または「文切り」としての“于是”の機能の方が(翻訳上にしろ)中国語として自然なように思われる。

4-2 2位“一直”の加訳(日→中)(49)の特徴

2位の副詞“一直”は(2012)《《現漢》》では①“表示顺着一个方向不变。”(「一方向に沿って変わらない」)②“表示动作始终不间断或状态始终不变。”(「動作がずっと絶え間がないこと、あるいは状態が絶えず変わらないことを表す」)③“强调所致的范围”(「指している範囲を強調する」)⁽⁸⁾と説明している。(2002)白水社では1.(一つの方向に向かって曲がらないで)まっすぐに、一直線に、ずっと2.(肯定文・否定文に用い;過去から現在、または現在から将来まで動作、状況が終始途切れず)絶え間なく、ずっと⁽⁹⁾と説明されている。㊦空間的連続(ex.「まっすぐに～する。」)㊧時間的連続(心理、動作、状態が途切れないこと。)と3-1の1位“一直”のところでも述べたが、(2008)三省堂や(1998)『講談社中日辞典』(以下、(1998)講談社と略す。)、(2004)『東方中国語辞典』東方書店(以下、(2004)東方書店と略す。)を見ても、この㊦㊧(㊦として「範囲」を強調する場合(ex.“从小孩一直到老人都非常激动。”)を(1998)講談社、(2008)三省堂は挙げるが、今回の3冊を調べた結果では「範囲」の強調は0例であった)を基本義として考えてよいであろう。

《恶意》では㊧の時間的連続が24例(全体24例)、《向》では㊧が21例(全体21例)(ともに㊦は0例)、《挪威》では㊦の空間的連続は1例、㊧の時間的連続は3例(全体4例)という結果になり、圧倒的に㊧の時間的連続の意味の“一直”の加訳(日→中)が多かった。(ex.「僕たちは、S君の身体が消えた謎について、本人に訊きさえすればすべてかいけつするとかんがえていたのだ。」(『向』 p.108) → “我们原本一直以为, 只要询问他本人, S君身体消失之谜就会全部真相大白的。”(《向》 p.79)。

“一直”の後の動詞については《恶意》では全体24例の“一直”の加訳(日→中)の中の8割が心理動詞であったが(3-1で既述)、《向》では全体21例の“一直”の加訳(日→中)の中の3例(“以为”“着想”“想”)が心理動詞であった。《挪威》(全体4例)については後続の心理動詞は0例であった。

4-3 2位“其实”の加訳（日→中）（49）の特徴

2位の副詞“其实”（49）の辞書の意味は（2012）《現漢》では“表示所说的是实际情况（承上文，多含转折意）”⁽¹⁰⁾「言っていることが実際の状況であることを表す（上文を承けて転折の意味を含むことが多い）」と説明している。（2002）白水社は1.（前節で述べた内容と衝突する場合）「その実」「実は」「実際は」2.（上文・前節で述べた内容に対し修正・補充をする場合）「本当は」「実のところ」「とは言うものの」⁽¹¹⁾ —と説明する。（2008）三省堂は「実際には」「実は」⁽¹²⁾とし、（1998）講談社は類義語の項で“其实”は「前文を承けてそれに対する反論・修正・補充を加える。多く逆説の気持ちを持つ」⁽¹³⁾とする。（2004）東方書店は「動詞または主語の前に用い、前文の意味と相反するか、修正・補充する働きがある」と⁽¹⁴⁾説明している。

実際には3作品の“其实”の加訳（日→中）数と内容を記すと、《悪意》は修正・補充が5例（ex.「（注：日高という友人は）すごくいい人間だと思うこともあれば、結構冷酷なところもあって驚いたりした。まあ大抵の人間はそうなのかもしれないけど」（『悪意』p.46）→“有时你会觉得他为人很好，不过他也有冷酷得令人惊讶的一面，其实大部分的人都是这样吧？”（《悪意》p.33））、反論が1例（ex.「いじめですか。ありましたね。最近になってマスコミが騒いでるけど、あんなもの昔からありました。」（『悪意』p.284）→“你是说校园暴力事件？有啊。最近媒体才大肆报道，其实这种事早就有了。”（《悪意》p.208））（全体6例）であった。《向》は修正・補充が18例、反論が1例（全体が19例）で、《挪威》は修正・補充が（上）11例、（下）12例、反論が（下）1例（全体が24例）であった。圧倒的に修正・補充の加訳（日→中）が多い。実際には修正と補充が区別が難しい場合もあるので、修正と補充を分けず、便宜上、ワンセットとして数えた。また、3-2で挙げた“其实”の修正・補充の意の例である「違和感。そうじゃない。～」（『向』p.195）→“有什么东西不对劲儿。其实也不是。”（《向》p.143）も反論ともとれないこともない。全体的には（1998）講談社の説明のように「逆接の語気を持ち」、（2012）《現漢》の説明のように「実際の状況」を表すとし、それが修正・補充・反論の意味を持つが、修正・補充の意味が反論の意味をあらわす場合よりずっと多いと考えるのが、今回の3冊を調べた結果では妥当と言えるようである。

最後に補充の加訳（日→中）例を挙げておく。実際例を見ると、修正より補充の方がずっと多いようである。「「ねえ、トコお婆さん。あれやつてくれないの？」ミカが言う。僕もちょうど、同じことを言い出そうとしていたときだった。」（『向』p.228）→“所婆婆呀，你做那个好吗？美加说。其实我也想提出同样的请求。”（《向》p.169）、「その週の半ばに僕は手のひらをガラスの先で深く切ってしまった。レコード棚のガラスの仕切りが割れている

ことに気がつかなかったのだ。」(『ノル』(下) p.108) → “这星期刚过一半, 手心被玻璃片划了一道很深的口子。其实唱片架上的一坡玻璃档格早已经打猎, 而我没注意到。”(《挪威》 p.25)

4-4 4位“然后”の加訳(日→中)(39)の特徴

4位の副詞(・接続詞)“然后”(39)の辞書的意味は(2012)《現漢》では“表示一事情之后接着又发生另一件事情”⁽¹⁵⁾(ある事柄の後に、別の事柄がつづいて起こることを表す)とある。(2002)白水社は「(‘先……, 然后又……了’ ‘先……, 然后再……’などの形で用い)それから、しかる後、その上で」⁽¹⁶⁾としている。日本語訳しか挙げていない。(2008)三省堂も「その後、それから」⁽¹⁷⁾、(1998)講談社も「それから、そのうえで」⁽¹⁸⁾、(2004)東方書店も①副 ~して②接 それから、その上で⁽¹⁹⁾同様に日本語訳しか挙げていない。(2012)《現漢》が大雑把に意味を説明しているぐらいである。“然后”については“接着”(引き続いて)別の事が起こる」ということが重要で、そうでない「前にあることが発生したあと出現した状況」を表す場合は“后来”などを使用しなければならないと説明するもの(ex.“起先她不愿意跟他结婚, 不知怎么搞的, 他们又生活在一起了。然后(x→后来)他们生活得十分美满。”)もあるが不明瞭な説明である⁽²⁰⁾。

《善意》で“然后”の加訳(日→中)の使用例は4例、《向》は31例、《挪威》は4例と、《向》が圧倒的に多い。明らかに《向》の訳者の嗜好性、癖によるものであるが、3作品の加訳(日→中)使用例の合計数によってランキングを今回は決定しているので、全体で4位という結果になった。

《善意》《挪威》ではともに0例であるのに、《向》だけ5例見られたものに、日本語が2文であるのに中国語が1文になり“然后”が加訳(日→中)される場合がある。(逆に日本語が1文で中国語が2文になる例は3冊ともない。また、日本語が2文で中国語も2文となり、間に“然后”があるものが3例あった。)“于是”の加訳(日→中)のことを考えれば、“于是”は「区切り」「文切り」の機能を持っていたが、“然后”は日本語が1文で中国語が2文になる例が皆無(3冊ともなし)であるから、「区切り」「文切り」の機能は持っていないことになるであろう。では、日本語が2文であるのに、中国語が1文となる“然后”が加訳(日→中)された《向》の5例をどう考えたらいいのであろうか。3-2で(2)として挙げた例は訳者が「時間的な順序」に非常にこだわって“然后”を加訳(日→中)した例であるが、この(2)は日本語が2文であるのに中国語が1文である例でもある。他の4例(日本語が2文で中国語が1文)を考察すると、いずれも日本語には明示的な表現のない時間的順序の表現を中国語では“然后”を加訳(日→中)して表現した

ものである。(ex.「玄関へ向かう。靴を履き、ドアをあける。首を上に向ける。」(『向』p.297) → “向玄关那里走去，穿上鞋，打开门，然后抬起头。”(《向》p.218)。) 訳者の「時間的順序」の表現を明示することへのこだわり、癖による“然后”の加訳(日→中)であると考えられる。

4-5 5位 “竟” “竟然” の加訳(日→中)(34)の特徴

5位の副詞“竟”“竟然”(34)の辞書的意味は(2012)《現漢》では“表示出乎意料”(意外なことを表す)⁽²¹⁾とする。(2002)白水社では“竟”は「(思いがけない状況が発生した場合)意外にも、なんと、こともあろうに」という意味を表し、同義語、類義語として“居然”“竟然”があるとする⁽²²⁾。(2008)三省堂は“竟”には「意外にも」、「竟然」には「なんと意外にも」の日本語をあて、“居然”と同じとし⁽²³⁾、(1998)講談社⁽²⁴⁾、(2004)東方書店⁽²⁵⁾も同様の日本語訳「意外にも」「なんと」「驚いたことに」「あろうことか」などをあてている。

《恶意》では“竟”は5例、“竟然”は11例、合計16例の加訳(日→中)例があり、第2位であった。また、《向》では“竟”は0例、“竟然”は3例、合計3例で9位以下であった。《挪威》では“竟”は11例、“竟然”は3例、合計14例で第4位であった。

“竟”の加訳(日→中)には次のような例がある。「一年や二年の数学がわかっていない者が、三年になって突然理解するということはありえない。～」(『恶意』p.319) → “连一二年级的数学都不会的家伙，升三年级后竟突然开窍了？”(《恶意》p.234)。次は“竟然”の例である。「僕らは立ちあがって外に出て深呼吸をした。新宿の町の空気がすがすがしく感じられたのはそれが初めてだった。」(『ノル』(下)p.161) → “两人欠身离座，到外面深深吸了口气。新宿街头的空气竟然如此沁人心脾，这在我还是第一次感觉到。”(《挪威》p.292)。

「意外性」については意味面で日本語と中国語でズレがある。また、統語面(形式面)でのズレもある。文体論的にはこの場合、日本語では表現せず、また表現すれば「言わずもがな」の感のある「意外性」を中国語では明示的に“竟”で表現していると言える。

4-6 6位 “实在” の加訳(日→中)(28)の特徴

6位の副詞“实在”(28)の辞書的意味は(2012)《現漢》では“①形 诚实，不虚假”以外、“②副 的确：～太好了 / ～不知道。③其实：他说他懂了，～并没懂。”⁽²⁶⁾と“的确”や“其实”と同じであるとしている。(2008)三省堂は「実際は、実は」と日本語訳を挙げ⁽²⁷⁾、(1998)講談社は「①実に、本当に②実は、実際は」と日本語訳を挙げている⁽²⁸⁾。(2004)東方書店も同様に「②確かに、本当に③実際には」と日本語訳を挙げる⁽²⁹⁾。(形容詞とし

ての“实在” (ex. “他有实在的本领。”) (彼は本物の力を持っている。) は含まない。) (2002) 白水社は「2. **副** (誰が何と言っても事実であることを強調し) 本当に、全く、誠に」とし “我～不知道。” = 「私は本当に知りません / “我～支持不住。” 私は全く我慢できなくなった」 / “～说” = 「正直に言うと、本当のことを言うと」、「～遗憾」 = 「本当に残念です」、「～抱歉」 = 「本当に申し訳ありません」という例を挙げる。また 3. 上文への反対・補充として「実際は、その実」の日本語訳を示し、例として“他说是他懂了，～并没懂。” = 「彼はわかったと言っているが、実際はわかっていない」を挙げる⁽³⁰⁾。

《恶意》では“实在”の加訳(日→中)例は5例であり9位、《向》では19例で5位、《挪威》では14例で7位以下である。

(2012)《現漢》が“③**副**其实”と、“实在”と“其实”を同義語としているのは注意を引く。4-3で既述のように“其实”は上文、前節の修正・補充の意の加訳(日→中)が実際の例では反論の意より圧倒的に多いが、日本語としては「その実、実際は」などが相当する。(2012)《現漢》が“实在”について“实在” = “③**副**“其实”“とするのはその意味 (=「その実、実際は」)であろう。しかし“实在” = “②**副**“的确”“とするように“的确”と“实在”が同義でもあるとするのは“的确” = “完全确实”⁽³¹⁾ = “完全对客观情况的真实性表示肯定”⁽³²⁾ (=「客観状況の真实性に対して完全に肯定を表す」ということであり、この場合、「強調」の意の「本当に」が日本語訳として適切であるとも考えられる。実際、“实在”の加訳(日→中)は「実は」という修正・補充(・反論)の意味以外に「強調」の意とも取れるものが圧倒的に多いのである。以下はその例である。「外で会うというのは危険でした。」(『恶意』p.208) → “在外面幽会实在太危险,” (《恶意》p.153)、「ミチオ君—申し訳ないが・・・」(『向』p.370) → “道夫君-实在是对不住・・・” (《向》p.274)、「いいわけするんじゃないけど、辛かったんだよ」と僕は直子に言った。(『ノル』(上)p.229) → “不是我狡辩，我实在痛苦。”我对直子说，～ (《挪威》p.147)。こうした例を見ると、加訳(日→中)の場合、“其实”と“实在”の棲み分け、使い分けがあるのではないかという仮説を立てることが可能なように思えてくる。“其实”は修正・補充(・反語)に使用され、“实在”は“的确”と同義で、「強調」の意味として使用されるということである。既述の『ノル』(上)3例、『ノル』(下)1例、計4例、《恶意》5例、《向》19例はすべて「強調」の意味で使用されている。(=“实在”の修正・補充・反語の意のものは0例である。)(2012)《現漢》からもそのことは一定程度、言えるのではないかと思う。

5 結語

以上、日本語表現が中国語表現になる場合、日本語表現にない接続詞(中)・副詞(中)

が加訳（日→中）される場合について、三つの現代日本文学作品と対応する中国語訳を資料として、その諸相を考察した。三作品の副詞、接続詞の加訳（日→中）使用頻度数ランキングは1位“于是”（62例。以下、数字は例数を表す。）、2位“一直”（49）、2位“其实”（49）、4位“然后”（39）、5位“竟”（16），“竟然”（18）（合計34）、6位“实在”（28）であった。全体的特徴（上記使用頻度数ランキング）としては“于是”には「文切り」「区切り」の機能があり、“一直”はほとんど時間的連続の意味（48/49）で、“其实”は修正・補充の加訳（日→中）が圧倒的に多かった（46/49）。“然后”は『向日葵の咲かない夏』→《向日葵不开的夏天》が圧倒的に多く（31/39）、訳者の「時間的順序」明示化への嗜好性が反映されている。“竟”（16），“竟然”（18）については『悪意』→《恶意》では“竟”（5），“竟然”（11）、合計16例の加訳（日→中）例があり『ノルウェイの森』（（上）（下））→《挪威的森林》では“竟”（11），“竟然”（3）、合計14例という“竟”と“竟然”使用の逆転現象が見られた。“实在”については「強調」の意のものがすべて（28）で、修正・補充・反語の意の“实在”は“其实”によって代替される、つまり“实在”と“其实”の使い分け、「棲み分け」現象が生じていると考えられる。

[付記] 本稿は日中対照言語学会第34回大会（2015年度冬季大会）（2015年12月20日於大阪）で発表した内容に基づいて作成したものであることを付言しておく。

[注]

- (1) 拙著（2007）pp.1-19
- (2) 拙著（2007）p.16
- (3) 伊地智義継編（2002）『（2002）白水社中国語辞典』白水社 p.696
- (4) （2002）白水社 p.696
- (5) （2012）《現漢》p.1584
- (6) （2002）白水社 p.1849
- (7) （2008）三省堂 p.1367
- (8) （2012）《現漢》p.1530
- (9) （2002）白水社 p.1758
- (10) （2012）《現漢》p.1017
- (11) （2002）白水社 p.1081
- (12) （2008）三省堂 p.866
- (13) （1998）講談社 p.1237

- (14) (2004) 東方書店 p.1039
- (15) (2012) 《現漢》 p.1085
- (16) (2002) 白水社 p.1172
- (17) (2008) 三省堂 p.926
- (18) (1998) 講談社 p.1324
- (19) (2004) 東方書店 p.1093
- (20) 呂才楨等著 荒屋勸編訳 (昭和 61) p.119
- (21) (2012) 《現漢》 p.691
- (22) (2002) 白水社 p.696
- (23) (2008) 三省堂 p.577
- (24) 1998) 講談社 p.847
- (25) (2004) 東方書店 p.704
- (26) (2012) 《現漢》 p.1480
- (27) (2008) 三省堂 p.1008
- (28) (1998) 講談社 p.1435
- (29) (2004) 東方書店 p.1181
- (30) (2002) 白水社 p.1284
- (31) (2012) 《現漢》 p.279
- (32) (2012) 《現漢》 p.1081

〔参考文献〕

- (1) 藤田昌志 (2007) 『日中対照表現論一付：中国語を母語とする日本語学習者の誤用についてー』
白帝社
- (2) 伊地智義繼編 (2002) 『(2002) 白水社中国語辞典』 白水社
- (3) (2012) 《現代漢語詞典》 商務印書館
- (4) (2008) 『超級ク라운辞典』 三省堂
- (5) (1998) 『講談社中日辞典』
- (6) (2004) 『東方中国語辞典』 東方書店
- (7) 呂才楨等著 荒屋勸編訳 (昭和 61) 『日本人の誤りやすい中国語表現 300 例』 光生館

《用例採取書目》

- ① 東野圭吾 (2009) 『悪意』 講談社 講談社文庫／姿美蓮译 (2009) 《悪意》 南海出版公司

- ② 道尾秀介（平成 21）『向日葵の咲かない夏』（＝『向』）新潮社 新潮文庫／于彤彤（2009）《向日葵不开的夏天》（＝《向》）新星出版社
- ③ 村上春樹（2010）『ノルウェイの森』（＝『ノル』）（上）（下）講談社 講談社文庫／林少华（2010）《挪威的森林》（＝《挪威》）上海译文出版社。